

陽気だより

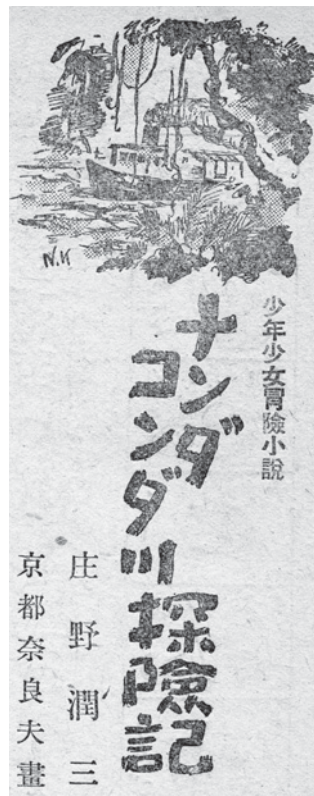
養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No. 50 2011.5.15

第6号(24年10月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で62年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。



(前号からのつづき)

ぼくとディックがナンダコ
ンダ川の上流にあるインディ
アン村に上陸すると、すぐに
一人のインディアンに見つか
った。ふたりは飛ぶように岸
へもどったが、妹のメッグの
姿が見えない。「しまった！
インディアンにさらわれた」

(四)

妹がつかまった以上、ぼく
らがへたなことをすると、妹
の生命があぶない。暗い川の
上を、ボートはエンゼンの音
高く出発した。ディックはボ
ートのへさきで、赤い信号灯
をゆっくり廻している。

敵はこの赤い火をみている
に違いない。やがて彼等はや
つて来るだろう。気味の悪い
鳥の鳴き声が聞えて来る。メ
ッグはどうしているだろうか？

ぼくはひとりでにみだがこ
ぼれた。

「心配するな、きっとメッグ
ちゃんを取りもどせるよ」

ディックがぼくをなぐさめ
てくれた。いよくという時

は、僕はピストル片手にイン
ディアンのかたまっている真

中へ飛び込んで行こう。メッ
グを取りかえすために！

「ホラ、来たぞ！」

ディックがさげんだ。星明
りの下に、すぐ手前の真黒な

山の上で、ディックは勢いよ
く信号灯をふりまわした。

「停止！」ぼくはボートに停
止をかけた人声が聞えてくる。

インディアンがつかまえて来
た。僕はピストルに手をかけ

ようとした。すると、ディッ
クが「待て」といった。
ボートが岸につくと、暗や

みの中から五六人のインディ
アンがサツと甲板へ飛び移っ
た。ディックとぼくとは突立
ったまま、彼等をむかえた。
その中の一人が何か短かくさ
げんだ。ディックはそれに答
えた。ぼくはディックがイン
ディアンの言葉を知っている
のにびっくりした。やがて僕
たちは、彼等に前後左右をか
こまれて連れて行かれた。

「どうするつもりなんだ？」

そつとぼくは聞いてみたが、
ディックは黙つてろという合

図をした。ディックは落ちつ
いていた。ぼくはこの時ほど

彼が男らしく見えたことはな
い。

暗い山道を曲がりくねりな
がら登っていくと、やがて燈

がいくつも見える建物の前へ
来た。こんな山の上にすばら

しく立派な建物があるとは！

(五)

中へ一歩入った時、ぼくは
アツと声を立てた。そこは光

りもまばゆい大広間で、両側
にズラリとインディアンが列

らんでいた。そして一番奥に、
何と、メッグがニコくしな

がら、ぼくたちの方へ手をふ
つているではないか。
ぼくはまんまとディックの

計略にかかったことに気がつ
いた。インディアンは何もお
そろしい人間ではなかった。

親切でほがらかな人間だ。今
年の春、しゅう長が、ぼくた

ちの町へ薬を買いに来た時に、
ディックは彼と会つて、すつ

かり仲良しになったのだ。
「夏休みには、必ず遊びに来

い。ごちそうしてやるぞ」
「有難う。きつと行くよ。友

達をつれて」そういう約束が
出来ていた。メッグも無論、

それは知らなかった。とにか
く、ディックは、ひどい奴だ。

しかし、ぼくはすぐに気げ
んを直した。インディアンが

すばらしい。それこそメッグ
のごちそうどころではないす

ごい料理を食べさせてくれ、
その後でずいぶん珍しいダン

スを見せてくれたから。
ディックもぼくもメッグも、

みんなの中へ入っておどった。
とても愉快な面白いダンスだ

った。
そして、翌朝、ぼくたちは

インディアンの友だちから、
とても珍しい、たくさんのお

みやげをもらつて、ボートに
山ほどつみ、また来年の休み

に来る約束をして川を下った
のだった。
(おわり)

信仰例話 (道友社刊『真実の道』より)

杉岡氏の入信記

念仏の盛んな農村で、お寺の門徒総代をつとめる地主の子として生れた私は、もとより天理教はきらいであった。それは師匠寺との厳しいつながり、屋敷を払うて田売りたまえ、てんつるてんのみこと、

信心すれば金も財産もまきあげられる、といううわさ、それに何となく教理も信者層も低級らしく見えることから、あまり好意はもてなかった。

その頃、近村の賢夫人といわれた医者の未亡人で、私の中学時代の学友渡辺君の母親が大勢の大学以下教育盛りの子女をかかえながら天理教に入信し、渡辺君は大学を中途退学して母親と共に布教して

いるという風評を聞いて、私はその一家をお気の毒なこと

だと思った。

ところが私の末弟が勉学中、強度の神経衰弱にかかり、医者も家族も持てあましていたが、母親はふとしたことから天理教の信心をするようになった。そして弟の病気はすつかり御守護頂いた。そして母は熱烈な信心生活に入った。私はびっくりした。弟の病はなおったが、今度は母がいよいよ世間のうわさ通り天理教にだまされて、歌ったり、踊ったりするようになるのかなと思うと悲しい、反対したが、母の信仰はびくともしなかった。



実の梅前殿祖教

をした。

その当時、つれ

そうた妻も胸と腎臓を患い孟家屯のサナトリウムで療養するうちに、私の市長在任中死んでいった。私はこの頃から天理教に心ひかれるようになった。というのは、当時、自分の外面の華美に反して、内面はいんうつな生活環境で、ことに妻の重患から道を求める心が動いて、或いは参禅をやったり、時には観音經の誦誦しょうじゆ行をやったり、またすすめ

身を投じ、およそ二十年勤務するうち、地方の署長、県庁の課長と累進し、その後満州に八年暮した。もともと私は青年時代、一度右の胸を患い、満州でも激しい中央の民政から、地方の市長などの職にたずさわるうち、また左肺をおかされて、数カ月間安静休養

られるままに念仏講の法話をやったり、生長の家の話を聞いたり、何でも精神的なものは、心の糧となるようなものは、病人にも聞かせ、自分も聞いて廻った。そのどれもが身のひきしまるような、涙の出るような結構なものではあったが、それは結局私には形式的な祈りであり、感激的なお話としか受け取れなかった。ところが、市内の天理教会の若夫人とその信者の二、三人たちが、当時、彼の地としては、はなはだ地味な身なりと、いんぎんな態度で、毎日熱心に妻の病床を尋ねて、病人を慰問し、自分のさんげとしてお祈りしてくれるのであった。私もその熱意に感動した。とくに臨終前後には、雇った看護婦や、腹心の部下さえ、いつの間にか姿をみせぬのに、この人たちが親切に看とつてくれ、あと仕末まで手伝ってくれるのを見て、真実だなど感激した。

こうした姿を目標きして、おぼろげながら天理教のほんとうの姿がわかったような気がした。そして母の信仰した気持ちがあわかって来た。

養徳社 よもやま話

○……東日本大震災の被災地では、スポーツ選手によるボランティア活動がはやってないほど盛んだ。某大学のラグビー部員が訪れた岩手の避難所には、同じ言葉を記した貼紙がいくつもあるといふ。

「ワンフオーオール オールフオーワン」(一人はみんなのために、みんなは一人のために)これはラグビー精神を表した言葉で、チームプレーの大切さを表現したものだ。

ある部員は、次のように話している。
「ラグビーの世界で、いつもみんなが口にしてる言葉。この場所、この言葉を見て、本当に意味することが理解できた気がしました」と。

未曾有の国難に立ち向かう「チーム・ジャパン」のスローガンに思えた。

○……六月号の「陽気」には、教内の震災救援のたすけあいの姿として、宮城県気仙沼市・唐桑半島を中心の活動ほかをまとめました。ご覧ください。

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用くださいますよう、お願い申し上げます。

養徳社

第1回公募

養徳社エッセイ賞

作品集 募集

選者 出久根 達郎 (作家)

枚数 400字詰め原稿用紙8〜10枚

締切 平成23年8月31日

入賞 一等正賞楯 副賞10万円 (一名)

佳作正賞楯 副賞3万円 (二名)

※詳細は『陽気』6月号39頁をご覧ください。

(以下次号)